2020年度　創価大学法科大学院

B日程　小論文試験

問題１（配点50点）

以下の文章（後記【出典】からの抜粋）を読んで，各設問に答えなさい。

社会というものは，そこから漏れ落ち（かけ）たときに，よく見えることがある。薄くなって初めて空気の存在に気づくように。

たとえば，学校や職場，就職活動などの場面で，コミュニケーションがうまくいかず，気詰まりな沈黙を招いてしまったり，周囲から浮いてしまったりすることは，そのような「漏れ落ち」経験の身近な一例である。あからさまな拒絶の反応が返ってくるわけでなくても，周囲の人びとの嘲笑を含んだ軽い驚きの表情や，受け止められも投げ返されもせずしぼんでゆく言葉が，どうにも居たたまれなくて，ぎくしゃくしてしまう自分の挙動を周囲の人びとがどう見ているかと思うとさらに居たたまれなくて，その場から消えたくなる。そうした経験は日常的なものであり，誰もが一度はそんな思いをしたことがあるのではないだろうか。

一方に，周囲から「あの人コミュ力高いな」と思われている人がいる。明るく親しみやすい雰囲気を放ち，人の話にテンポよく切り返し，華やいだ笑い声を上げる人。自然体でありながらその場の「空気」を壊さない。というよりも，自分が自然体で振舞える「空気」をいつの間にか作り出して，なおかつ強引さはなく「感じよく」ありつづけられる人。そんな人たちの土台には「私はみんなに興味を持たれている」というまっとうな自信があり，それが「ナチュラルな感じのよさ」を根本から支えている。

他方には「コミュ障」と名指される人がいて，彼ら・彼女らには「無口で暗い，ノリの悪い，空気の読めない人」という印象が付きまとっている。「コミュ力の高い人」が持っている「ナチュラルな感じのよさ」が，「コミュ障の人」にはない。がんばって言葉を発しノリを合わせるよう努力すれば，輪に入ることはできる。だが，がんばったぶん家に帰るとどっと疲れが出てへたり込んでしまい，長く続かない。コミュニケーションをまったく楽しめていない自分に気づき，その場はうまくいったにもかかわらず，自信を喪失してしまったりする。だからといって「ナチュラル」でいると，「あの暗い人」と言われ遠ざけられてしまうのだからややこしい。

「コミュ障」とされる人とはいわば，コミュニケーションという道を一緒に歩いているのに，周囲の人と歩幅が違っているために，他の皆が何事もなく通り過ぎていく裂け目に足を取られてつまずき，落ち込んでしまうような人，ではないだろうか。

コミュニケーションの裂け目にはまり込んでしまった人は，単に「そのとき・自分が気まずい」だけではなく，気まずさを自分に対して可視的にすることで，「気まずい自分を見る

自分」を成立させ，そのことで気まずさを増幅させてしまうようなところがある。もちろんなかには，周囲の人が「コミュ障」と名指すけれども当の本人にはまったくその自覚がない，という場合もあるだろう。だがこの言葉は「克服する」「治す」などの語とセットでしばしば使われており，「自分はコミュ障だ」と自覚して生きづらさを感じている人が多いように思う。つまりこれは「あいつコミュ障だよな」という外からの揶揄であると同時に，「私コミュ障だから」という内からの自虐の言葉なのだ。

そこには「コミュニケーションがうまくいかないこと」自体にもまして，「あの人はいま裂け目に落ちた」と周囲の人に気づかれていること，それを意識してますます言動が不自然になってしまうことがしんどい，という面がある。それは，否応なしに「自分が他者からどのように見られているか」を反省的に意識させられる経験であり，三面鏡をのぞきこんだように，「見る自分，を見る自分，を見る自分‥‥」の連鎖が可視化されていく。

そして，このように自分の足下がぐにゃりとゆがみ，地面はまったく磐石ではなかったと知るとき，そのなかにすっぽりとくるまれていたあいだは意識する必要もなかった「社会」のようなものの一端が，あらわれるのだ。それは，そこからこぼれ落ちる自己にとって敵対的な異物としての「社会」である。そうした意味での「社会」の輪郭を掴みやすいのは，「コミュ力」があるとされる人よりも「コミュ障」とされる人の方だろう。

しかし，「社会から漏れ落ちてはじめて社会が見える」というのは一つの側面でしかない。「社会から漏れ落ちている」と思っている人が，実際にはこの社会に深く根ざした存在である，ということがある。

くり返しになるが，「コミュ障」とされる人は単にコミュニケーションがうまくいかないのではなく，「うまくいっていない自分を他者はどう思っているか」という再帰的な視点を発生させるために余計にしんどくなっている。これはよく考えると不思議なことだ。「自分は周囲からどう見られているか」と他者の視線に配慮できるということは，その人が「社会性」を持っていることを示している。つまり，ほんとうに社会から漏れ落ちていたならば，「社会から漏れ落ちている自分」に痛みを感じることも少ないと考えられるのだ。

「コミュ障」は 2010 年代になって広まった言葉だが，こうしたいわば「非社会性の社会性」とも言うべき事態そのものは，古くからある。「不登校」と呼ばれる現象である。不登校は，日本では 1950 年代末から報告があり，現在も継続している。「子ども・若者と社会とのつながり」をめぐる社会問題の「老舗」といえる。

これまで，不登校やひきこもりになる人は「社会性がない」と見なされてきた。たとえば，1983 年の文部省の生徒指導資料は不登校の子どもや養育者について「適応性に欠ける」「社会性が乏しい」と表現していたし，1990 年の青少年白書は，不登校をひきこもりとともに「非社会的問題行動」と見なしていた。一般的にも，特に 1970 年代半ばから 90 年代にかけての，「よい学校に入ってよい会社に入る（あるいはそういう人と結婚する）ことを，社会に認められたよい人生」と考える「学校＋企業＝社会」という信憑のもと，教室になじまない不登校やひきこもりは，それだけで「社会から漏れ落ちた」存在と見られがちだった。

しかし，「不登校は社会と疎遠である」という主張には，二つの点で疑問をさしはさむこ

とができる。

第一に,「社会問題の社会学」の視点からみれば,「不登校を見ると社会が見える」と言える（森田洋司『「不登校」現象の社会学』学文社・1991 年，加藤美穂『不登校のポリティクス―社会統制と国家・学校・家族』勁草書房・2012 年)。たとえば，第二次世界大戦後から2000 年前後くらいまでの中学校の長期欠席割合を示すグラフは,「U 字型」を描く。すなわち，いったん減少し，底を打って，ふたたび増加するのだ。学校が定着していく初期のプロセスにおいて，都市－農村や貧富の格差が大きかった 1950 年代ぐらいまでは，経済的事情や親の教育意識の希薄さなどから，学校に行かない子どもは多く存在していた。それは「不登校」というよりも，より広範な領域に関わる前近代性の，学校における表れとして理解できるものだった。その後，近代化にともない子どもの長期欠席率は減っていく。底を打つ 1970 年代半ばは，日本社会が一定の近代化を達成した時期だといえる。この頃，第三次産業従事者数が第二次産業従事者数を上回り，専業主婦率が戦後最も高くなり，高校進学率が 90 パーセントを超える。そして,「学校に行き企業に就職する＝社会とつながる」という等式が成立していく。だがこれ以降，長期欠席率はふたたび増加に転じるのだ。学校は近代化のための装置であり，近代化が達成されればその目的は失われる。登校する意味は自明でなくなり,「どうして学校に行かなくてはならないのか?」と問うようになった子どもたちが，さまざまな理由から学校を離れ始めるのは不思議ではない（貴戸理恵『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』岩波ブックレット・2011 年)。

人びとが何を問題と見なし何に苦しむかということは，社会的文脈に影響されながら決まっていく。このようにマクロな視点から見れば,「社会から漏れ落ちた存在」としての不登校・ひきこもりは，戦後の日本社会が何を「社会」と見なしてきたのかを，逆照射する存在とも言えるのだ。

第二に，個々の「社会とのつながりにくさ」というミクロな面に照準した場合にも,「不登校の人は社会性がない」とは言えない面がある。これは，そもそも不登校という概念を通じて，いったい何が問題とされてきたのか，という点に関わっている。

不登校という概念の根幹には,「人が合理的な理由なく他者や社会とつながらない状態」がある。不登校とは，文部科学省の問題行動調査によれば,「何らかの心理的・情緒的・身体的，あるいは社会的要因・背景により，児童・生徒が登校しない，あるいはしたくともできない状況にある者（ただし,「病気」や「経済的な理由」による者を除く)」を指す。

この「合理的な理由なく」という点がミソである。「学校に行きたいのに貧乏だから行けない」とか「勉強がイヤだから学校をサボりたい」ということなら，理解可能だ。だが，それらの理由が見られないにもかかわらず，人は時として，社会とのつながりをもてなくなることがある。不登校とは，そのような事態を概念化したものなのだ。

1970 年代ごろから精神科医として不登校（当時は「登校拒否」）問題に取り組んだ梅垣弘は，神経症的な長期欠席を識別するために，子どもが示す「すくみ」反応に注目していた（梅垣弘『登校拒否の子どもたち』学事出版・1984 年)。従来型の長期欠席のように怠学や教育意識の希薄さが理由であれば,「学校なんて行きたくない」「どうして学校に行く必要がある

のだ」と反抗することはあっても，「学校に行け」という登校刺激に対して「行かなくてはならないのは分かっているのにできない，自分はだめだ」と立ちすくんでしまうことはない。

神経症的な長期欠席におけるすくみや不安は，本人の緊張感を高め萎縮させ，ますます登校から遠ざける。だから，およそこの現象が問題化されたごく初期から，学校に行かない子どもに対する専門家介入の一つの方針は，登校圧力を下げることで，当事者のすくみ反応を緩和することだった。神経症的な長期欠席のごく初期の学術的な報告である「神経症的登校拒否の研究」（佐藤修策『登校拒否ノート―いま，むかし，そしてこれから』北大路書房・1996 年）のなかで，著者の佐藤修策は不登校への対応について次のように書いている。

親は機会あるたびに説得したり，おどしたり，しかったりして登校させようとする。時に教師もこれに参加する。家庭生活はすべて登校に向けられ，おやつにも「学校に行けば･･･」の条件がつく。この刺激にクライエントは反抗し，逃避し，柱にしがみついて反応するのは全ケースにみられる現象である。この親や教師の刺激づけは登校拒否症状，神経症の強化（reinforce）に役立つのみである。症状は進展する。したがってまずこの強化関係を絶つことである。具体的には親や教師に登校拒否の原因について理解を求め，登校へのいっさいの努力―強圧的なものも，説得的なものも放棄するよう助言することである（同書 21 頁）。

ここで「強化関係」という言葉によって示唆されるのは，他者の価値や態度を内面化しているという意味で「社会性がある」にもかかわらず―というより，社会性があるからこそ―社会とつながりにくい，という逆説である。「個人が社会をつくり，社会が個人をつくる」とする社会心理学の古典的な議論によれば，他者の態度を内面化することによって人は社会の一員となる（Mead, G. H., *Mind, Self, and Society; from the Stand point of a Social Behaviorist,* ［The University of Chicago Press, 1934］，稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店・1973 年）。だが現実には，人が他者との共同社会を営むことは，それほど単純なものではないようだ。

そこにおける「社会」とは，「自己を突き離す敵対的なもの」であるだけではない。それは「漏れ落ちた」という自己認識と，「漏れ落ちた自分を他者はどう見るか」という自意識のスパイラルのなかで，「自己を過剰に絡め取っていくもの」でもある。

「コミュ障」とされる人の自意識にも，これと同様の循環を見ることができるように思う。「コミュ障」とされる人は「社会から漏れ落ちている」ように見えやすいが，くり返すが「コミュ障」と名指されるのを怖れること（あるいは先回りして自虐的に「コミュ障」を自称すること）は，その人が「空気」を読んでいることの証左ともいえる。つまり，「コミュ障」とされる人は，社会から漏れ落ちているのではなく，否応なく社会に絡めとられている。

【出典】貴戸理恵『「コミュ障」の社会学』（2018 年，青土社）
※小論文の出題に合わせ，脚注等に変更を加えている。

【設問 1】

「コミュ障」と自覚している人が認識している「社会」とはどのようなものであると筆者は捉えているのか。文中の言葉を使って 100 字以内で表現しなさい。

【設問 2】

「非社会性の社会性」という筆者の言葉を解読して，筆者が「コミュ障」についてどのような考え方をしているかを 300 字以内で説明しなさい。

【設問 3】

この本の著者である貴戸理恵氏は，本書の「おわりに」において，次のようなことを書いている。この文章を読んで，筆者が「コミュ障」を自覚している人たちに対してどのような思いをもち，また，この問題を通じて今後日本社会に何が求められると考えているかを分析し，併せて自分自身の意見も述べなさい。250 字以内とする。

明示的に示しているわけではないが，本書の文脈において私は「社会性/コミュニケーション能力」を三つの次元に分けて考えている。第一に教室や職場などの場において「うまくやる」ためのもの，第二に異文化の人と意思疎通を行うもの，そして第三に，「他者が見るように自己をみる」という社会学/社会心理学における社会化過程で発揮されるものである。

不登校・ひきこもりの人は，通常第一の意味において「コミュニケーション能力がない」とされる。だが，彼ら・彼女らは不登校・ひきこもりの状態にある自己が社会の中で許されない状態であることを知っている。「社会的に許されない状態にある」という自覚が，不登校・ひきこもりの苦しさの多くを構成している，といっても過言ではない。つまり，第三の意味における「社会性」ならば—持ちすぎるくらい—持っているのだ。社会的価値を共有し，社会に立ち交じることを望んでいるのに，そうならない存在。このような存在を見ていると，「個人が社会的存在となる」とは，何と謎めいた複雑なプロセスなのだろうと思う。

そして，考えなければならないのは，「社会性/コミュニケーション能力がある」とされる側についてだ。なるほど，この人びとは不登校・ひきこもりの人びととは違って第一と第三の意味での社会性をともに持っているだろう。だが，しばしば「コミュ障」を異端としてはじき出すコミュニケーションは，空気を読むことを自明とすることで，その空気を共有しない異文化との対話から遠ざかる。もっと言えば，空気に殉じて不登校・ひきこもりの人を「コミュ障」と断じる態度そのものが，第二の意味でのコミュニケーション能力が萎れている証左かもしれない。「グローバル化」や「ダイバーシティ」が強調される現代社会において，どのような対話のちからが必要とされているのか，それを培うべきは誰なのか。考えていかなくてはならないだろう。

以上

2020年度　創価大学法科大学院

B日程　小論文試験

問題２（配点50点）

以下の会話文を読み，学生AとBいずれの意見を採用すべきか，理由を挙げつつ論理的かつ説得力のある文章を作成しなさい。また，その際に，採用しなかった学生の意見に対する批判と，採用した学生の意見に対する改善点をそれぞれ１つ以上加えること。

なお，本問は架空の人物の会話であり，法律の知識を問うものではない。また，文章の形式（意見書や上申書など）に留意しなくてもよい。

学生A：この間，大学の入学試験で女子を優先的に入学させる選考基準があるという話を聞いたんだ。その時に，入学選考基準に性別が加わっていることに違和感を覚えたんだけど，Bはどう思う？

学生B：確かに男女平等は大切なことだと思うけど，大学や学校が「入学するに値する人を選考する」のが入学試験なわけだから，学校側が入学資格を有するかどうかの審査基準を自由に決めていいんじゃないかなと思うよ。そういう意味では入学選考基準に本人の資格や能力の他に性別が加わっていてもおかしくないような気がするよ。だって，男子校や女子校だってあるんだから。

学生A：まあ，確かに最初から男子しか出願できない，女子しか出願できない･･･って性別による出願資格を採用しているところもあるね。ただね，もしも，出願資格を有していて入学試験も受けた結果，入学試験の成績が合格基準を満たしているのに性別で不合格になる場合があるとしたらやっぱりどうかと思う。当日の入学試験の成績だけで選考してほしいなあ。

学生B：じゃあさ，例えばスポーツ推薦入試とかはどう？これも当日の入学試験の成績だけじゃなくて，部活で良い成績を残したとかの業績が選考基準に加わるものだけど，これはどう思うの。

学生A：うーん。学生時代の努力の結晶となるものは，入学試験の際にも報われるべきだと思うから，部活で良い成績を残したとか，大会で優勝したっていう業績は選考基準としてあってもいいと思う。選考基準にすべきなのは優秀さ，実力，業績，功績みたいな本人の努力によって結果が出せるものに限定すべきだと思うから，部活動での記録とか学業成績とかが選考基準になることは認められるとしても，人種や性別みたいな本人の努力ではどうにもならない要素は選考基準にすべきじゃないかな。

学生 B : じゃあ，例えばさ，あまり日本では考えられないことかも知れないけど，学校側が「教育のためには生徒の多様性を確保し，異なるバックグラウンドを持つ生徒間で交流させることが必要だから，多様性確保のために様々な人種や性別を選考基準に入れます」って掲げていたらどう？全く同じ入学試験の成績だったとしても，多様性の確保のために人種で合否が分かれることがあることになるけど，それについてはどう思う？
学生 A : 私の理論だとダメだと思う！自分の努力でどうにもならないことを選考基準にしちゃいけないと思う。
学生 B : そうかあ。でも，多様性の確保って教育をする側だけじゃなくて，教育を受ける側である学生にとっても重要なことだと思うんだよね。そう考えると，学校側が自分の努力ではどうにもならない要素を加味して入学者を選考する必要もあると思うよ。
学生 A : え，じゃあ，B の意見だと，多様性確保の目的で，場合によっては入学試験で入学可能な得点を満たしている受験生が入学できないことも，入学可能な得点に満たない受験生が入学することもありえるってこと？
学生 B : 場合によっては認められるかなと思う。例えば，学校側が「多様性確保の目的で留学生を優先的に入学させている」って選考基準を事前に示している場合，入学可能な得点を充足していない留学生が優先的に入学することがあっても問題ないんじゃないかな。
学生 A : B の意見はそうなんだね。私は入学者選抜で検討されるべき本人の能力や資質というのは，結局本人の努力の表れだと思うから，なるべくそれ以外の要素，恣意的に左右される可能性のあるものは選考基準から排除してほしいと思うなあ。
学生 B : なるほど。A は一貫して自分の努力でどうにかなる部分を基準に選考すべきってことだけど，そもそも学業成績って自分の努力の前に家庭環境や学習環境の影響が強いよね。例えば，学習環境の整う経済状況を有する家庭だと子どもの学業成績が高くなったり，両親の学習に向けた意識が高いと子どもの学業成績が高くなったりすることは知っているよね。･･･ということは，自分の努力ではどうしようもできない，格差のある学習環境を前提にして培われているのが本人の能力や資質なんじゃないかな。だから，単純な試験の成績だけでは本人の能力は図れないと思うんだ。本人の努力でどうしようもできない部分も選考対象に入れるべきだと思うよ。
学生 A : それって極端な話，本人の努力でどうしようもできない学習環境の格差まで含めて選考することになって，学習環境が整っていなかった受験生を優先的に入学させるケースも生じることにならない？たしかに，学習環境の格差があることは否めないけれど，その格差是正の目的まで踏まえて選考基準を考えるべきじゃないし，そんなことしちゃったら何のための入学試験かわからなくなりそう。どんな学習環境であったかまでを考慮して能力を検討する必要はないと思う。入学試験でどれだけの成績だったか，結果としての学業成績がどうだったのかで判断すれば十分だよ。
学生 B : 個人的には，お金をかけて優秀な家庭教師を何人もつけて良い成績を残した人と，

独学で勉強して同じような良い成績を残した人では，後者の方が優秀な人だと思うけどなあ。
学生 A : いやいや，受験日当日とそれまでの本人の努力した結果が全てだよ。B は，学校側がひとたび選考基準に立てたならば，本人の努力以外の部分も選考基準に入ることを認めるべきだと考えているようだけど，見方を変えたら多額の寄付をした受験生が優先的に入学するということも認められることにならない？
学生 B : うーん，それも私の理論だと認められることになるかな。もしかしたらその寄付で奨学金受給者を増やせるかも知れないじゃない。そう考えると，学校側が「多額の寄付をした受験生を優先的に入学させる」ことを選考基準に掲げていたなら認められるべきことだと思うよ。
学生 A : なるほど。今回，B と議論できてよかったよ。私たちの所属する大学は入学者の多様性を確保することに成功しているってことがわかったから。

《参考文献》
マイケル・サンデル著 NHK「ハーバード白熱教室」制作チーム小林正弥・杉田晶子訳『ハーバード白熱教室講義録+東大特別授業［下］』（2012 年，早川書房）